

対して、反復性の生理的な範囲内の力が加わることでにより生じる。わが国ではこの概念がまだあまり知られていないため、悪性病変(骨転移)と誤診されることが多い。鑑別点は、患者の背景や病変の分布(典型例では骨シンチグラムで仙骨 H 型集積パターンを呈する)、単純 X 線写真・CT で骨折線や骨硬化像を確認することが重要と思われる。

8. ^{201}Tl SPECT により検出された乳癌温存療法後の再発例

池上 匡 小池 繁臣 杉山 正人
齊藤 節 (横浜南共済病院・放)

近年、わが国でも乳癌の温存療法が施行されるようになり、乳腺内再発の検出が問題となっている。腫瘍摘出術のみでは 5~15% の再発の可能性が指摘されているが、術後照射を併用することで 1~2% に低下する。一方手術創に沿って、照射後長期間にわたり炎症性腫瘍を触知するが、大部分は 1 年以内に縮小ないし消失する。この炎症性腫瘍と再発腫瘍とを鑑別するための検査法の確立が必要である。われわれは最近、乳癌温存療法後の照射野内再発例を経験したが、Tl-SPECT が再発腫瘍の検出および炎症性腫瘍との鑑別に有効と思われたので報告する。

症例は乳癌温存療法、術後照射後の手術創部に遷延するしこりがあり、約 1 年半の経過後 US, MMG, CT にて再発の疑いを指摘された。Tl-SPECT では早期後期像ともに異常集積を示し、wash out も遅延し悪性所見と考えられた。再手術により照射野内再発が確認された。

9. 腫瘍 SPECT が再発巣の検出に有用であった舌喉頭重複癌の 1 例

戸川 貴史 油井 信春 木下富士美
柳沢 正道 (千葉がんセ・核)
幡野 和男 (同・放治)
小村 健 (同・頭頸科)

舌癌喉頭癌放射線治療の約 6 か月後に出現した局所再発巣 3 か所(いずれも術後の組織学的検査で再発と確認された)のうち、舌癌の skip lesion と喉頭癌の局所再発巣の 2 か所が、術前の dynamic CT では検出

されず ^{201}Tl SPECT ではじめて明瞭に陽性描画された。さらに、舌喉頭全摘術後におこなわれた ^{67}Ga SPECT では咽頭後壁に異常集積が認められ再発が疑われ、細胞診で同部位から癌細胞が検出された。この手術後の咽頭後壁の再発巣も dynamic CT では検出できず、腫瘍 SPECT により術後の再発も指摘し得た。

10. くり返し発症した横紋筋融解症の 1 例 — ^{99m}Tc -HMDP シンチグラフィ所見の差異—

小泉 潔 アリ・S・アルバブ (山梨医大・放)
新井 誉夫 (同・放部)

横紋筋融解症は外傷、高体温などの原因により横紋筋の融解、壊死をきたす疾患であり、高ミオグロビン血症により腎不全を併発することがある。くり返し本症をきたした 21 歳男性の HMDP 骨シンチ所見の差異につき報告した。1 回目の発症は消防士の試験で筋力テストを受けた後、腹痛嘔気出現、さらに乏尿をきたした。2 回目の発症は 5 か月後、消防学校訓練後に悪心嘔吐、大腿部痛出現し腎機能低下をきたした。検査成績上は 1 回目の方が重症であった。骨シンチは 1 回目は発症 7 日、2 回目は発症 3 日に行い、上腕および大腿の筋にはほぼ同程度の集積をみた。後者では hot kidney を呈していた。2 回目の発症 17 日目の再検で集積は消失していた。重症にもかかわらず 1 回目の所見は 2 回目と同程度であったのはシンチ施行日が発症から少し経っていたためと思われる。なお、CT や MR 所見は骨シンチより見劣りしていた。

11. 転移性肺腫瘍を有する腺腫様甲状腺腫の 1 例 —甲状腺片葉切除後にバセドウ病を発症—

福島 理枝 日下部きよ子 牧 正子
井口 信雄 小林 秀樹(東京女子医大・放)

転移性肺腫瘍を有し甲状腺片葉切除後に腺腫様甲状腺腫と診断されたが、後に肺転移巣からの CT 下 biopsy にて濾胞癌と診断され、残存甲状腺よりバセドウ病が発症した興味ある症例について報告する。症例は 63 歳男性、主訴は特になく、NIDDM にて入